

きた
来るべき良い羊飼い

復活節第4主日C年

旧約聖書において、ご自分の民をエジプトの奴隷状態から解放し、約束の聖地へ導かれる神は、羊飼いの役目を果たされるのですが、まれにしか羊飼いという呼び名を用いられません（創49・24, 48・15, 詩23・1, 80・2）。その名前はイスラエルと他の国々の希望として来るべき方のものであるようです。昔、羊飼いという呼び名は、国を支配する人に与えられましたが、イスラエルでは通常、王たちに与えられるものではなく、将来やって来る王、新しいダビデだけに与えられるはずのものと考えられていました。そのようにエレミヤが準備したエゼキエルのメッセージによれば、神はご自分の民である群れを、良い羊飼い、メシアに委ねられるのです。

その信仰の真理について少しでも理解を深め、実感するために、思いめぐらしてみましよう。子どものころ、典礼の時に、ある歌をよく耳にしました。それをとおして会衆は復活された主に話しかけます。「いと高き主よ、あなたは祭壇の上で、羊飼いと子羊の業の両方をなさいました」と。主が最も高い方と言われるのは、神であると同時に、人間であり、御父の子であると同時に、ナザレのマリアの子でもあるからです。その最も高き方が、わたしたちの羊飼いとしてこの世に派遣されました。しかし、御父が望まれる羊飼いになるためには、主は、子羊にもならなければなりませんでした。それについてさらに考えてみましょう。

羊飼いの一つの役目は、群れのためにより牧草地を見つけることです。聖書で羊飼いは、遊牧の生活を意味します。季節にしたがって、群れを異なる土地に連れていかなければならないからです。出エジプトの後、神が砂漠で民を導かれるのは、特別なケースです。民の方から言うなら、その冒険に身を任せるのは、非常識なことで、徹底した神への信頼に基づいていなければ、まったく無茶なことでした。もちろん、そうした信頼に応え得るのは神だけです。四十年間、すなわち、民が砂漠を旅する間、約束された地に着くまで、神は大自然から生じない「天からのパン」で、民を養ったのです。マナと言われたそのパンは、コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がしました（出16・31）。そのパンはただ生きるための糧ではなく、約束の土地を記憶にとどめ、その土地への憧れを抱き、そこに到達して楽しむ希望を養うものでした。なぜなら、そのパンが白く、蜜の味がしたのは、目ざす土地が白い乳と甘い蜜の流れる豊かなものであったからです（出3・8）。神はそのように、約束された土地への苦難の多い道程で、ご自分の民を支えたのです。

これらはすべて歴史上の事実であると同時に、来るべき羊飼いと、彼が与えるパン、約束された永遠の生命への道、この世における道のりで、ご自分の子羊を養い、支えるためのパンの先取りでもありました。その意味で、ご聖体というパン、永遠の生命を信じる信仰、希望、愛を増すものとして、単なるパンではなく、マナのように、永遠の生命への希望を養う記憶でもあります。マナが蜜の味であるように、ご聖体は、永遠の生命の味がします。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の生命を得る」と主は言われます。一方、ご聖体がわたしたちの羊飼いからいただく超自然的なパンであるなら、彼が子羊にならなければそのパンを与えることはできなかったのです。預言者イザヤは彼についてこう言っています。「わたしたちの背きのために刺し貫かれ、わたしたちの咎のために砕かれた。ほふり場に引かれる子羊のように、毛を切る者の前に、物を言わない羊のように口を開かなかった」（イザ53章参照）。

ご聖体は、わたしたちの羊飼いの過ぎ越しを意味します。その過ぎ越しは受難と死をとおして行われます。わたしたちの羊飼いは、こうして、わたしたちの糧になることを可能にしたのです。

典礼に照らして、わたしたちの羊飼いは、御父から課せられた務めを果たすために、子羊にもならなければならなかったことについて考えました。しかし、それに対して、典礼からではなく、人間の普通の考えからくる反論があります。人間を単に群衆と考えるなら、その人々は信念のしっかりした者たちではなく、浅薄で、実際に自分の生活で何を行いたいのか、どんな人間になりたいのかも明らかではなく、操られやすい人たちのように考えられます。羊飼いである主イエスの群れについてはどうでしょうか？

聖アウグスチヌスは、それに対して簡潔で要領を得た回答をしています。つまり、わたしたちは食べた物、パン、ご飯などは、数日後、もはや食べ物ではなく、わたしたちの体になります。ですが、ご聖体については不思議なことが行われます。つまり、ご聖体がわたしたちの体ではなく、わたしたちが主の体になっていきます。主は、わたしたちが真の人間になるために、天から降られた偉大な模範です。空には、無数の星が散らばっています。その一つひとつが、真の星と言えるのは、自らの光を持っているからです。わたしたちの世界には無数の人間が住んでいます。彼ら一人ひとりが真の人間と言えるのは、復活された主の聖霊の光が、彼もしくは彼女のうちに輝き、その光がその人の生活のうちに命になっているときです。その命は、農夫、労働者、スポーツ選手、教師、政治家など、いろいろな姿を取るでしょう。

わたしは、毎日、たくさんのを洗濯し、そのアイロンかけをする大変な働き者で、本当に人間らしい一人の女性を知っています。彼女は学業を小学校しか終えていませんでした。修道院に入って25年間、ひたすら洗濯とアイロンかけの仕事をしていました。彼女が聖イグナチオの霊操に参加したある日、面接室に入ってくると、泣きながら話してくれました。「神父様、主は、わたしが彼と共に世の光である、とおっしゃいましたが、それはほんとうですか」。わたしは「主が嘘をつくことはありませんよ」と答えました。彼女の心配は、今からの生活は耐えられないほど重いものになると考えたのです。わたしの話を一生懸命に聞いてくれました。「これからは、今までと同様に、修道院の洗濯とアイロンかけをやり続ければいいのです。ただ、それはただ修道院の仕事のお手伝いではなく、すべての人間が乗っている船が、永遠の生命に下ろされているいかりから離されないように手伝っている、ということを忘れないように、と申しました。彼女は三年後に聖母病院で亡くなりました。お見舞に行った時、少しドアを開けると、壁に貼られた大きなカレンダーが見えました。過ぎ越しのローソクの絵でした。そのローソクは、ほとんど使い尽くされて、もはや数センチしか残っていません。言わば、ローソク全体は炎になっていました。それは、人間の体に受け取られ、命になっていた聖霊の光の、燃え尽きそうな彼女の命に相応しいシンボルでした。羊飼いの命を映し出している、キリストの群れの子羊のシンボルでもありました。

J. E. Perez Valera S. J.